文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」

TEEP 進化型実務家教員養成プログラム NEWS LETTER

VOL.44

進化型実務家教員養成プログラム　第3回 TEEP コミュニティ交流会

学生指導を実践して思うこと ～実務家教員だからこそできること～

進化型実務家教員養成プログラム（TEEP）では、基本コース・専門コースを終えた修了生と、これから受講を予定している人たちとが交流する場として「TEEPコミュニティ交流会」を開催しています。今年度は2024年2月10日、名古屋市立大学滝子キャンパス1号館を会場に、今期のキャリアデザイン（実践編）担当講師も務めた修了生3人に「学生指導を実践して思うこと～実務家教員だからこそできること～」と題して語ってもらい、さらに大学で既に教鞭を執っておられる第1期修了生からもお言葉をいただきました。その様子を紹介します。

今川 隆さん
キャリアデザイン(実践編)
担当講師

坂本 工さん
キャリアデザイン(実践編)
担当講師

吉本 修三さん
キャリアデザイン(実践編)
担当講師

成田 亙さん
東海学園大学准教授

鵜飼 宏成
名古屋市立大学 大学院
経済学研究科 教授
TEEP実施委員長

鵜飼 私も実務家教員の一人ですが、実務家教員になった後に課題が明らかになります。さまざまな人と経験、交流を重ねながら自分の技能や考え方を絶えずアップデートしていくことが欠かせません。その意味で、このTEEPコミュニティ交流会は修了した人と、これから入ってくる人たちの交流の場を第一の目的としつつ、先輩から後輩が学ぶ、そして先輩は伝えることによって、さらに自分がやってきたことを確認する機会になればと思って企画してきました。

今年度はキャリアデザイン実践編においてTEEP修了生5名に「キャリアデザイン」「一皮むけた経験」「キャリア開発」について大学1年生に教えていただきました。今日はそのうちの3名に「学生指導を実践して思うこと」をテーマに報告していただき、それを踏まえて第1期生の成田亙さんには実際に大学に専任で所属することで分かった、学術基盤の先生と実務家教員の相互関係や違いといったところも論点にしていただこうと思います。

実務家教員の使命は「越境力、往還力の発揮」

今川 私はエネルギーインフラ企業の社員、中小企業診断士、名市大経済学研究科修士課程（修了予定）、

「実務家教員のあり方は百人百様」

成田 私はTEEP第1期生で、その後2022年4月から東海学園大学で経営学部の教員をやっています。広告会社に三十数年勤めた後、独立してからTEEPに入り、その後教員になりました。大学の教員をしながら事業も並行して行っているという少し珍しいパターンかもしれません。

大学時代は音楽しかやらず、勉強はぜんぜんしていなくて成績も非常に悪かったので、まさか教員になるとは考えていませんでした。いろいろあって教員を目指すことになったのですが、今思うとTEEPに入って本当によかったと思っています。

一番大きいのはすばらしい先生たちに出会えたこと。特に大学院を出ていない自分にとって、鵜飼先生という指導教員ができて、ご指導を受けられたことは何にも代えられない財産になっています。次は志を同じくする方々にたくさんお会いできたこと。3つ目は大学の先生の授業を、受ける側として見られたことです。今の大学の授業の仕方や、ゼミ、制度、入試、カリキュラムなどなど全くわからなかったので、ここで勉強させてもらったことは非常に役立ちました。特に後期の専門コースは、それぞれの先生方の勉強を大学院生と一緒に学べて、課題をどう出しているのか、資料をどう作っているのかなど、生きた教材として学べました。今、私が授業をなんとかやれているのはそのおかげの部分がかなりあります。

大学教員を目指される方は、専門分野や応募する担当科目を何にしたらいいか悩まれると思います。そこは「自分がある程度分かるもの」程度に考えても問題ないと思います。なぜかというと、大学の先生というのは専門性が高い一方、柔軟性も求められるからです。大学教員になると、例えば自分の場合、広告をやっていたので広い意味でマーケティング分野の科目も任されたりします。そういう柔軟性というか、幅も大事になってきます。なので最初の狭い専門性というところに立ち止まってあまり悩む必要はなく、できそうだと思える担当科目の募集に応じていけばよいのではないかと思います。

現在年間13科目を担当していますが、それ掛ける15回分のシラバスを考えなければいけない。これを1年目の直前の半年間で考えるのがメチャクチャ大変でした。膨大な量の資料を作らなければならなかったのですが、そのとき頭の中で勝手に想像していた学生と、実際に授業で向かい合う生の学生はかなり違っていて、やりながらそのギャップを修正するのにも時間がかかりました。何を教えるかと同時に、相手によってどう教えるかも大事だと痛感しました。

大学では学生の育成や教育というのは、私のような教育職員だけではなく、事務職員も含めてやっています。就活も経験し、企業で働き、企業の採用面接も行っていたということで、学生から様々な相談や質問が来ます。それらは学術基盤の先生方や事務職員の方々では答えきれないものもあります。誰もしないこと、できないことを、実務家教員がそれぞれの専門性や得意分野をいかして補っていけばいいのではないかと思います。実務家教員にはいろんなタイプや形があり、研究、教育の仕方、目指す方向も人それぞれだと思います。

私が今、一番力を入れているのは企業と大学を結びつけることです。それを授業の中に導入して、大学の外での活動を積極的にやっています。大学も学生も外の世界とのつながりを広げていくことは大事だと思っています。それが結果的に大学の個性やプレゼンスにもつながっていくと考えています。

鵜飼 成田先生には大学に身を置かれているということで、ひと味もふた味も違う視点で語っていただきました。TEEPは「あるべき姿って何だろう」というところを基本にしていて、「どうなるか」というところは教えていません。そこはキャリア開発という視点から自分で戦略を立てるところがあります。立てるときの戦略の雛形は示している状態ですが、中身を埋めていくのは皆さん自身です。それを補完していくのがこのコミュニティ交流会という位置付けでもあります。これから実務家教員を目指すTEEP生にとって示唆に富むお話を、ありがとうございました。

2020年4月の創刊号より4年間にわたり発行してまいりましたニューズレターですが、文部科学省の補助事業終了に伴い、紙媒体での発行は本号が最後となります。長年に渡りご愛読いただきまして、心より感謝申し上げます。2024年度以降も、TEEP事業は継続してまいります。ニューズレターもPDF形式に変更して、以下URLのTEEPオリジナルサイトで情報発信していく所存です。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。 https://teep-consortium.jp/

TEEP Training for Emerging Educators and Practitioners　TEEPコンソーシアム
中核校：名古屋市立大学
連携校：岐阜薬科大学　高知県立大学　中京大学

TEEP 進化型実務家教員養成プログラム | NEWS LETTER | VOL.44
発行者　TEEPコンソーシアム実施委員会　事務局　名古屋市立大学教務企画室内　〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1
発行日　2024年4月1日　連絡先　E-mail：teep_office@sec.nagoya-cu.ac.jp

名市大非常勤講師の4つの肩書きがある状態です。

TEEPでは基本コースでいろんな学問分野の最新の動向を知ることができ、専門コースでは経営学、経済学の大学院教育を理解できたのが非常に大きかったです。それを通じて実務家教員の使命は何だろうとこの3年間考え、自分なりに出した答えは「越境力、往還力の発揮」でした。

大学も教育だけではなく研究と社会貢献という、大きく分けて3つやらなければいけないことがあります。実務家教員こそ、この3つの柱の中で越境力を発揮する、または実務社会との間で往還力を発揮するといった横の展開を大いに期待されているのではないかと考えました。それによって「学びと仕事をつなぐ」「学生の動機付けを高める」「社会人とリカレント教育をつなぐ」ことができます。

TEEPでの学びは、授業の構想を考え、効果の高い授業を実践することに効果がありました。キャリアデザイン実践編では、自身の経験や自身の事例を入れておくのですが、さらにそれを補強する経営学の理論や思考を引き出す経営支援のフレームワークをはめ込んで学生に興味を引いてもらうようにしました。具体的には私のサラリーマン経験を語ったとき、「弱いつながりの強さ理論」という経営学の理論をはめ込みました。こういった理論を見せると学生も乗ってきて、興味を持って聞いてくれました。

「相手に合わせた臨機応変な場づくり」も非常に有効でした。次世代エネルギーの演習では、議論が進まなければ問いを投げ掛けたり、別の視点を与えてみたりし、逆に議論が進んでいれば観察者に徹したり、書記役に代わったりしました。自分の所属するエネルギー業界の話にはあまり学生の興味がなさそうだったので、手短に仕上げて、逆に事例に合った経営学の理論には興味を持たれたので、そこに時間を割きました。ペアワークでは発表者の指名方法を工夫しました。皆さん真摯に深く考えているけれど、自分からは挙手しなさそうだったので、いい話が聞けた人に挙手してもらい、その話の作り手に話してもらいました。

名市大の学生は学習に対して極めて真面目で、国際化への準備意識が高く、皆TOEICなどを意識して勉強しています。その学びが将来、実務社会でどういかせるのか、イメージできるような先輩の体験事例やレポート、理論を情報提供することが重要だと感じました。名市大では医学、薬学、理学、芸術工学、看護学など多様な学生が学んでいます。そういった学生にPBLで越境学習を体感してもらい、さらに多様な価値観や視点の相互作用の醸成ができればと考えています。

TEEP修了以降はキャリアデザイン3講座、多文化共生と国際貢献の15講座をやらせていただく予定になっています。研究に関しては中小企業のBCPに関して修士論文を書いたので、それを地域活性学会や経営診断学会などで発表したいと思っています。社会貢献についてはリカレントフォーラムでの登壇や、アイデアひらめきコンテントに参加し、実務社会では引き続き企業の社員をしながら、中小企業診断士としてBCPや事業承継、組織開発などを勉強しているところです。

娘のアドバイスで「成功体験よりも失敗談」

坂本　私は静岡県浜松市出身で、今は名古屋市緑区に住んでいます。54歳で妻と娘2人がいて、柴犬のリョーマを飼っています。「坂本さんちのリョーマ君」として近所では評判です。1993年にデンソーに入社し、2022年にTEEPの第2期を修了しました。

キャリアデザイン実践編では23年11月と12月に合計6コマを担当。医学、薬学、経済学などのあらゆる学部から聴講しに来てくれましたので、皆に共通する内容を話しました。

講義の構成はTEEPの模擬授業のとき、鵜飼先生に「90分、学生の興味を衰退させずにうまくまとめることが大事」と伺ったことを思い出して考えました。そこで、まず学生のことを知らなければいけないと、当時ベストセラーになっていた『先生、どうか皆の前でほめないで下さい』という本を買いました。必ずしも名市大の学生に当てはまるとは限りませんが、今どきの学生は「横並びが基本」「人の意見は聞くけれど、自分の意見は言わない」「自己肯定感が低い」などの特徴があると事前にリサーチをしました。

さらに、大学生と高校生の娘たちにもいろいろなアドバイスをもらいました。TEEPの授業で鵜飼教授に教えていただいたフックを掛けるとは、娘の言葉で「キーワードを多用する」。そうすると学生たちが後で振り返るときに話を思い出せるそうです。また、「成功体験よりも失敗談を教えて」と言われました。そこで、私の「一皮むけた経験」の授業のときには、とにかく失敗談をたくさん並べました。

TEEPの授業で鵜飼教授から一方的に喋ってはダメと教えていただいたため、クイズ形式で問い掛けをするようにしました。「入学以来、成長の達成度は想定と比較して何%ぐらいですか?」と聞き、もし差があるとすれば「その差の要因は?」という問い掛けをして、ペアワークで考えてもらいました。

授業を終えた後のリアクションシートでは、私の業務や海外勤務、留学に関する質問が多く出ました。これはある程度、想定通りでしたが、私にとって想定外のリアクションが2つありました。1つは「メンタルの維持・立て直しに関する質問」がものすごく多かったこと。もう1つは「一歩踏み出すためのきっかけが得られない」という意見が多く寄せられたことです。

これらを通して私自身が感じたことは、今どきの学生が抱えている環境は複雑ながら、一生懸命考えて行動しようとしていること。コロナの影響を直に受け、高校時代は閉じこもった生活をしたのに、大学時代に一気に活動できるようになるわけがありません。そこは大人がしっかり理解しなければいけないと考えました。

また、目の前のことに日々頑張っているので、長い目でキャリアを考える機会がない。そんな学生たちにキャリアデザインの授業はとても価値のあるもので、そこに私自身が携われたことはありがたい経験でした。実務家教員が社会の経験や学生が知り得ないような経験を伝えていくのは、学生たちの将来にとって有効だと感じました。

振り返ると出てきた「問いと行動」のテーマ

吉本　私は普段はゼネコン系の管理会社にいますが、趣味で顧客ロイヤリティやSDGsについて研究しています。直近1年間は関西学院大学や大阪経済大学、名市大で主に社会人をメインに研究のことを教え、中国系の留学生の指導もしました。

名市大で授業を持たせてもらった大学生はおとなしく、授業中の質問が少なかったので、やる気のある社会人大学生とは対象的でした。1年生はまだ高校の延長の感覚で来ているのかもしれません。また、キャリアデザインを教えても、今の学びが将来にどうつながるのかのイメージがまだ難しいのかなと感じました。

大学での授業は、全体的には楽しかったです。学生にもそれが伝わっているのか「いつもニコニコしていますね」と言われました。自分が学生からどう見られているのか、やってみて初めて気付けました。一方、苦労したのは授業の準備、特に構成とペアワーク、そして質問への回答でした。

実際にキャリアデザイン実践編でどのように授業を計画したのかというと、内容は前の担当の先生と被らないようにし、フックの掛け方と「笑い」を入れるように考えました。実際はなかなか思い付きませんでしたが。

1回目の講義で自己紹介として自分の経歴と資格を紹介したところ、資格の質問が多かったので、やはり資格は皆さん興味があるのだと思いました。私自身が学生時代に趣味で始めた資格取得を活かして就職先を探したので、ペアワークでは「皆さんの個人的な取り組みは何ですか」と問い掛けました。「それを活かした自分ならではの、もしくは向いている職業や分野は何がありますか」とも聞いたのですが、これがなかなか難しかったようです。私自身の反省すべきところではありますが、逆に分からないものを与えるということで、自分自身で考えることにはなったかと思います。

2回目の「一皮むけた経験」の講義では、企画職・マンション管理での経験に加えて「エフェクチュエーション（成功した起業家たちに共通する考え方を体系化した論理）」について触れたところ、リアクションペーパーでこれについての質問が多くありました。ペアワークを通じて考えてもらい、エフェクチュエーションの実践にはなったのですが、行動までには至らなかったのが反省すべきところです。

3回目のキャリア開発シートの講義の時点では、何人かからレポートが出てきましたが、皆さん進路について迷っていることが分かりました。そこで何かいいきっかけがないかと考え、問いの立て方について教えることにしました。例として「自転車事故を減らすためにどのようにしたらヘルメットをかぶってくれるのか」という問いに対して、「どのようにしたら髪の毛がぐちゃぐちゃにならないでヘルメットをかぶれるのか」や「どのようにしたら必要な瞬間だけヘルメットをかぶれるのか」とリフレーミングした問いの立て方を紹介しました。

一方、授業のテーマを決めていなかったのも反省点で、振り返ってみると「問いと行動」といった感じだったと後で気付きました。ボリュームが多めで、難易度ももう少し下げるべきだったので、今後調整していきたいと考えています。

いかに学ばせるかは、その人その人に合わせていかなければなりません。これをやっていくと副次的に、部下の指導にも変化が出てくるものと思います。自分自身にも意外な発見や新たな気付きがあり、今後も反省をいかしながら授業をしていきたいと思います。